

福井県の芸術文化分野における歴史的観点から 見た特徴的事項 追補版

	(頁)
美 術.....	1
* 福井県出身・ゆかりの著名な美術作家・運動家等（追記）	
工 芸（追記）.....	4
書 道.....	5
* 福井県出身の全国規模で活躍する書道家（追記）	
洋 楽	
合 唱.....	7
吹奏楽部門.....	8
室内楽・管弦楽部門.....	9
邦 楽.....	11
* 福井県出身・ゆかりの著名な音楽家（追記）	
演 劇.....	13
文 学	
詩.....	14
俳 句.....	14
短 歌.....	15
川 柳.....	15
* 福井県で行われている主要な文学コンクール（追記）	
* 福井県出身の文学者等にちなんだ取組み	
* 福井県出身の近代以降活躍の著名な文学者（追記）	
茶道・華道.....	22（追記）
映 画.....	24（追記）
* 福井県出身・ゆかりの著名な映画監督等（追記）	
漫画・アニメーション.....	26（追記）
福井における若者の文化活動について.....	27（追記）
* 福井県内大学における文化部・文化サークル活動と所属人数（追記）	

【美術】

大正期から昭和50年代にかけての約60年間活動した「北荘・北美」(北荘画会・北美文化協会)の美術運動がある。美術界の本流とは異なるフィールドでの新しい表現形態を持った作品が生み出された「北荘・北美」の運動は、地方における特異な美術運動として今も評価されている。

特に、初期の「北荘」からは、福井の洋画黎明期において重要な役割を果たした作家が多く輩出され、昭和23年(1948年)以降の「北美」からは、既成の表現にとらわれない個性的な作品が生み出されるとともに、若狭を拠点とする「若美」(若美作家協会)の美術運動も生まれた。

◆北荘画会

- ・ 北荘画会は、大正11年(1922年)、大正期新興美術運動の中心人物であった木下秀一郎の未来派論に賛同するかたちで、福井の土岡秀太郎を中心に堀田清治らによって北荘画会が結成された。
- ・ その後、北荘は、フォービズムや海外超現実主義の作品展を開催し、シュールレアリズム(超現実主義)をいち早く紹介。若い世代に衝撃を与え、前衛精神が受け継がれていったが、昭和12年(1937年)に活動を終える。

※未来派………20世紀初頭、イタリアを中心に起こった前衛芸術運動。近代文明の産物や機械の登場によって生まれた新たな視点を芸術に取り入れようとした。

※フォービズム……野獣主義；原色による強烈な色彩や激しいタッチを特徴とする。

◆北美文化協会

- ・ 戦後、北荘画会の伝統を受け継いで、昭和23年(1948年)に北美文化協会が設立された。設立会員は木水育男ら教育関係者が多く、創造美育運動と呼ばれる児童画教育運動を推進した。北美主催の夏期講習会には、阿部展也や岡本太郎等の日本の現代美術を切り開く作家とともに、毎回新鋭の美術評論家も招かれ、単に実技の講習だけでなく、広く現代美術の諸問題が討議され、これを通じて多角的に現代美術の動向をとらえることができた。
- ・ こうした活動を経て、個性的作品を生み出す作家を多く輩出する。八田豊、檀尾正次、山本圭吾、五十嵐彰雄らが個を貪欲に追及し、独自性のある表現を獲得し、全国的あるいは世界的にも評価される現代アート作家となり、現在も活躍している。

◆若美

- ・ また、昭和50年、「北美」の美術運動に参加した長谷光城の呼びかけにより、松宮喜代勝らが参画して若狭を活動拠点とする「若美」が結成され、新しく開かれた美術活動の確立を基本に、グループ展や美術講座、学習会等の活動を積極的に行い、マスコミ等でも高く評価された。

このように、近・現代における福井の美術を語る上で、「北荘画会」や「北美文化協会」の運動や、これから派生した「若美」の歴史的意義は極めて大きく、特に、「北荘・北美」の運動は、県内外で活躍する美術作家たちにも様々なかたちでその影響を見ることができ、その運動思想は現在も綿々と受け継がれているといえる。

◆美術の活動者人口

- ・ 本県の美術分野の活動者は、中学校・高校の部活動参加者が1,700人余り、趣味的活動者も含めた大学生以上の活動者が約1,200人程度で、合わせてほぼ2,900人余りである。
- ・ 社会人としての活動は、時間的余裕があることが前提となるので、退職者や子育てが一段落した主婦などが多く、高齢化がやや進展している。

本県出身・ゆかりの著名な美術作家・運動家等（追記）

○^{おかくらてんしん}岡倉天心（美術家、美術史家、美術評論家、美術指導者。本名 ^{かくぞう} 覚三；1863—1913）
越前福井藩の出身で、横浜で貿易商を営む岡村勘右エ門の次男として出生
東京開成所（現・東京大学）に入所し、英語が得意だったことから同校講師のアーネスト・フェノ
ロサの助手となり、日本美術研究を手伝ったことが天心の生涯を方向付けた。
大学卒業と同時に文部省に入省。フェノロサ等とともに東京美術学校（東京藝術大学）設立に尽力。
明治23年、同校校長となり、横山大観、下村観山、菱田春草らの画学生に大きな影響を与え、明
治31年、大観、観山、春草らと日本美術院を創設し、近代日本画の創造を目指す活動を行った。
東京都台東区に岡倉天心記念公園（旧邸・日本美術院跡）がある。

○^{すずきちくま}鈴木千久馬（洋画家。福井市出身；1894—1980）
東京美術学校（現東京藝術大学）西洋画を卒業後、帝展、文展、日展など官展系作家として活躍。
昭和31年の日展出品作で、翌年、日本芸術院賞を受け、昭和47年には福井県初の日本芸術院会
員となる。
作品は、福井県立美術館、東京国立近代美術館、東京都現代美術館、目黒区美術館、山梨県立美術
館、福井県立美術館、佐久市立近代美術館などが所蔵

○^{ほったせいじ}堀田清治（洋画家。福井市出身；1898—1984）
旧制中学時代に油絵を描き始め、卒業後、太平洋美術研究所で学ぶために上京。その後、帰郷した
際に同郷の土岡秀太郎、木下秀一郎らと北荘画会を創立し、福井の美術分野の地盤形成に尽力した。
大正13年、再度上京。昭和元年には、「大樹のある風景」で念願の帝展初入選を果たした。また
この頃、恐慌の影響下に喘ぐ当時の思潮を反映したプロレタリア的な画題の作品を多く生み出した。
昭和33年には、アトリエを構えた武蔵野を拠点に^{しんかいじゆしゃ}新槐樹社を創立し、後進の指導に当たった。
昭和45年以降、晩年までのほぼ15年間、日本各地を旅し磨崖仏や観音像を題材に制作を続けた。
作品は、福井県立美術館、武蔵野市立吉祥寺美術館、多摩市教育委員会、柏市民ギャラリー、練馬
区立美術館などが所蔵

○^{たかだひろあつ}高田博厚（彫刻家。石川県出身；1900—1987）
明治36年、父親の弁護士開業により福井市に移住。大正7年、福井中学卒業後に上京。油彩画を
始めたが、のちに彫刻に転向。
昭和6年、単身渡仏して、ジュール・ロマン、ルオー、ジャン・コクトーら多くの文化人、作家た
ちと交流を持ちながら、第2次世界大戦中もヨーロッパに留まり、毎日新聞社の特派員となる。戦後、
読売新聞社の嘱託等をしながら彫刻の勉強を継続。昭和32年の帰国後、東京藝術大学講師などを務
めたが、公職は徐々に引退し制作に専念。日仏の著名文化人をモデルにした肖像彫刻等で知られる。
作品は、福井県立美術館、福井市美術館、東京国立近代美術館、東京都美術館、神奈川県立近代美
術館、北海道立近代美術館、パリ・マイヨール美術館などが所蔵

○^{おのただひろ}小野忠弘（造形作家。青森県出身；1913—2001）
東京美術学校（現東京藝術大学）卒業後、昭和17年、三国中学（現三国高校）に図画教師として
赴任。以後、三国町に移り住んだ。

戦後、自由美術家協会展、日本国際美術展、個展等で個性的な作品を発表して注目され、昭和34年、サンパウロ・ビエンナーレに、翌年、ヴェネツィア・ビエンナーレに日本代表作家として招待され、国際的に高い評価を受けた。また、創作活動の一方で、人材の発掘育成にも努め、アートディレクター戸田正寿とだせいしゅなど多くの優秀な芸術家を育てた。

平成17年、三国町の高台にある小野の住居兼アトリエを改修し、これに「ブルーケーキ」と称される新しいギャラリーを加えた小美術館「ONO MEMORIAL」が整備された。

作品は、福井県立美術館、国立国際美術館、青森県立美術館、富山県立美術館、奈良県立美術館、大原美術館、高松市美術館、ローマ近代美術館などが所蔵

○三上 誠みかみ まこと（日本画家。大阪府出身；1919—1972）

旧制福井中学から京都市立絵画専門学校（現京都市立芸術大学）日本画科に進む。卒業後の昭和24年、京都において、日本画の革新的研究グループ・パンリアル美術協会を結成。前衛作家として実験的な作品発表により日本画に現代美術としての新しい絵画表現の領域を開いた。

福井県立美術館以外に、東京国立近代美術館、京都国立美術館、東京都現代美術館、神奈川県立美術館、栃木県立美術館、兵庫県立近代美術館、ミズーリ州セントルイス美術館等で、個展や二人展、グループ展等が頻繁に行われている。

○久里洋二くりようじ（漫画家、アニメーション作家。鯖江市出身；1928—）

幼少期から絵が好きで、美大進学を目指したが戦中前後の混乱の中で断念。昭和25年に上京。税務署に勤務の傍ら横山泰三よこやまたいぞうに師事して漫画家を目指す。その後、二科展での特選受賞、自費出版「久里洋二漫画集」の文芸春秋漫画賞受賞等で注目されるようになる。久里実験漫画工房を立ち上げ、実験的アニメーションを中心に独創的な作品を次々と発表。ユーモアあふれるナンセンスな作品で国内外の数々の賞を受賞。日本を代表する国際的なアニメーション作家として海外での評価も高い。

○榎尾正次かしおまさじ（立体造形作家。南越前町（旧南条町）出身；1933—）

昭和31年、福井大学の学生のと時から北美文化協会に参加。昭和41年、東京国立近代美術館の現代美術の新世代展に招待出品し、和紙の立体造形で注目された。和紙造形の先駆者として、国際ペーパーアート展（ドイツ）など国際展への出品が多く、“和紙の榎尾”として知られる。

作品は、福井県立美術館、東京国立近代美術館、愛知県立美術館などが所蔵

○山本圭吾やまもとけいご（ビデオ・アート作家。福井市出身；1936—）

高校生の頃から北美文化協会の活動に加わり活動。福井大学在学中から二科展等に出品していたが、福井商業高校の視聴覚教室担当になった昭和43年頃からビデオを使った作品制作を開始

日本国際美術展（東京都美術館）、サンパウロ・ビエンナーレなど大規模国際展でもビデオ・アートの作品を早くから発表。昭和60年、「ふくい国際ビデオ・ビエンナーレ」の開催にも尽力し、都市部ではなく出身地の福井から先進的な芸術文化を発信。その後も、光州ビエンナーレへの招待出品やヴェネチア・ビエンナーレでの日本側ディレクター就任など世界第一級の国際展等で活躍し続けている。

【工 芸】（追記）

戦後の美術工芸分野の振興発展を目的に設立された3つの主要な団体の設立と活動を中心に記載

◆福井県工芸作家協会の設立

- 昭和16年頃、彫刻の三輪信一^{みわしんいち}や木工の池田片鍊^{いけだぺん}を中心に設立された南越工趣会^{なんえつこうしゆかい}や工人社^{こうじんしゃ}などの南越を中心に美術工芸活動の動きがあり、百貨店や公会堂等を会場に展覧会を開催していたが、その活動はまだ未熟であった。
- 昭和27年、福井県工芸指導所が設立され、所長に染色の山田外夫^{やまだほかお}が就任し、行政が美術としての工芸も支援するようになり、さらに、同年、福井県工芸協会が結成され、初代会長に三輪が就任して活動を始めた。
- しかし、工芸協会が次第に産業団体としての色彩が色濃くなると、昭和36年、美術工芸作家のための団体として新たに福井県工芸作家協会が設立され、三輪を会長に、また、副会長に山田を置いて美術工芸に力を入れ、原子光生^{げんしこうせい}（陶芸）、服部正斎^{はっとりまさとき}（漆芸）らが活躍した。
- 昭和49年から公募による新人の発掘や育成を行うほか、講習会等も開催し、美術工芸の普及向上に貢献したが、現在は会員数も少なくなり、活動休止の状態である。

◆福井県工芸懇話会の設立

- 昭和55年、伝統工芸を基に時代に即した新しい工芸を築き、県の工芸美術の向上発展に寄与することを目的として、宮部修光^{みやべしゅうこう}を会長に、福井県工芸懇話会が設立された。会員は県内在住の工芸を専業とする作家で構成され、木村盛和^{きむらもりかず}（陶芸）や久世武助^{くせたけすけ}（陶芸）らが活躍
- 平成に入って、会員数の減少とともに、次第に活動も縮小し、現在は活動していない。

◆現代工芸美術家協会福井会の設立

- 昭和56年、工芸美術の創作活動を奨励し、新人を育成し、福井の現代工芸美術の発展に寄与することを目的として、現代工芸美術家協会石川会から独立して同福井会が設立。（株）福井新聞社社長を代表に、玉村登玉^{たまむらとうぎよく}（陶芸）、竹内英輔^{たけうちえいほ}（鋳物）、田村民男^{たむらたみお}（陶芸）、窪田嘉晴^{くぼたよしはる}（漆芸）、司辻光男^{かさつじみつお}（陶芸）、塚崎勝規^{つかさかつのり}（陶芸）、富田信行^{とみだのぶゆき}（漆芸）、神門和記^{こうどかつき}（染）、森田清照^{もりたきよてる}（塗）など、多くの優れた作家が参画し、現代美術としての新しい工芸分野を開拓する活動を開始
- 福井会展を開催するとともに、日展等権威ある中央公募展への出品を通じて制作に励み、特選、入選等の優れた受賞実績を積み重ねている。また、日展の役員や審査員に就任する作家も生まれるなど、同会は本県の美術工芸分野の中核的団体として発展

【書道】

◆戦後の書道文化の動向

- ・ 戦後、中学校の書道の教員や書道教員をめざす福井大学の学生の中に、本県の書道教育や書道界のレベルアップを図りたいという気運があった。
- ・ そうした中、中央書壇や内地留学で実力をつけた教員や大学生を中心に書道団体を設立して公募展等を実施するとともに、書道教室を開設して書写・書道の普及活動を行うことにより、優れた指導者が育成されるとともに、書道人口も増加していった。
- ・ 一般的に昭和 20 年代・30 年代は生活もまだ豊かでなく、身近に楽しめるものも少ない中で、精神的な潤いや楽しみを求めて、若年層の特に多くの男性が書道に参加していった。こうした参加者の中から、現在の本県書道界の中心的存在・けん引役となっている指導者も生まれた。

すぎもとちようん

◆杉本長雲と戦後書道界の発展

- ・ 戦後の本県書道界の発展において、当時福井大学教授であった杉本長雲の果たした役割は大きい。杉本は、流派へのこだわりを捨てて各派一致協力することが、書道文化の発展のためにまず重要と考え、リーダーシップを発揮しながら戦後の書道界をまとめていった。
- ・ 特に、昭和 25 年、県内 12 流派（無所属を入れて 13 派）が加盟する統括的な団体として福井県書作家協会が設立され、書道文化発展のための協力体制が整備されたこと、県書道教育研究会が設立され、県書道教育研究大会や県下学童競書大会等により、学校教育における書道教育の推進体制が整備されたこと、また、昭和 10 年に創設された「県かきぞめ競書大会(福井新聞社主催・若越書道会共催)」が、現在では県内の児童・生徒等による約 7 万点の応募がある一大公募展に発展し、子どもたちの書道の技術レベルの向上に大きく貢献していること、これら本県書道文化発展の礎は、杉本の尽力によるところが大きい。

◆中央書壇公募展等に見る高い書道レベル

- ・ 戦後、日展入選は遥かな彼方の目標と考えられていたが、昭和 27 年杉本長雲が入選。これが刺激となり、翌年からは後続を断たず、昭和 32 年には大量 12 名の入選という快挙もあった。
- ・ また、毎日書道展も権威ある公募展の 1 つであるが、昭和 28 年では漢字部門の特選入賞者合計 11 名中本県書道家が 6 名を占める本書道展始まって以来の記録的成績を打ち立てた。本県書道家は、現在も中央書壇の有力公募展で入選・特選等の好成績を収めている。

◆本県の書風

- ・ 全国レベルの主な書道団体として 20 団体程度と言われる中で、特に有力な団体として毎日書道会と、毎日書道会から分裂してできた読売書法会がある。
- ・ 毎日書道会は関東系で自由・革新的な書風、対して読売書道会は関西系でやや伝統・保守的な書風と言われているが、本県の書道団体・書道家については読売書法会系が 6～7 割で、書風としては伝統的、保守的な部類に属する作品が多いようである。

◆書道人口の減少

- ・ 関係者に対する聴取り調査を総括すると、本県において書道教室に通うレベル以上で活動している書道人口は 3 万人弱で、そのピークは平成 7、8 年ごろであった。近年の減少傾向の要因は少子化もあるが、若年層の活動参加がほとんどなくなったこと、塾通いやスポーツ少年団への参加など子どもたちの課外活動の対象が広がったことなどが挙げられている。
- ・ 書道人口に関する全国比較のデータ等は見当たらないが、人口に対する活動者の割合が高い府県として、長野県、京都府、兵庫県が挙げられ、富山、石川、福井の北陸三県も比較的多いと言われている。

本県出身の全国規模で活躍する書道家（追記）

○稲村雲洞いなむらうんどう（福井市出身；1924—）

日本の前衛書の第1人者。全国最大規模の書道団体毎日書道会の最高顧問、全国規模の前衛書団体けいせいかい奎星会（昭和17年設立）の名誉会長等の要職を務める。

全身全霊を込めて一気呵成に書き上げる躍動感あふれる勇壮な筆致が評価されている。

平成20年には叙勲を受章

○村寄鴨畦むらよせおひけい（福井市出身；1925—）

昭和41年、日展無鑑査作家となる。

福井県書道教育研究会会長、若越書道会会長、福井書人連盟会長、福井県書作家協会会長など県書道界の主要団体の代表を歴任。また、日展会員、毎日書道展審査員、読売書法会理事・審査員、謙慎書道会常任理事等全国規模の主要団体の要職も務め、書道文化の振興発展に貢献してきた。

日展入選・特選、福井県文化賞、地域文化功労者文部大臣表彰等数々の権威ある表彰を受けるとともに、平成8年には叙勲を受章

○今村桂山いまむらけいざん（福井市出身；1938—）

昭和34年、21歳にして日展に初入選、以後、同展審査員を務めるとともに平成20年には福井県書道界ではじめて評議員に就任。その他、読売書法展常任理事、日本書芸院常務理事、日展福井会会長を務めるなど、福井県書道界だけでなく中央書壇でも目覚ましい活躍を続けている。

特に関西書壇の振興発展に貢献したとして大阪府知事賞を受賞

○石川九楊いしかわきゅうよう（越前市（旧今立町）出身；1945—）

5歳で木村そうがく蒼岳塾に学び、8歳で杉本ちよううん長雲に入門。中学で垣内かきうちようせき楊石に師事し、1字をもらい九楊と号する。

京都大学法学部に入学して弁護士を目指したが、次第に書道部活動に没頭。大学卒業後、民間会社に就職したが退社し書家を志す。以後、書家としてだけでなく、書に関する文化論等でも頭角を表し、平成3年、「書の終焉」でサントリー学芸賞受賞、平成15年、「日本書史」で毎日出版文化賞受賞を受賞

京都精華大学教授・同大学表現研究機構文字文明研究所所長

○吉川壽一よしかわじゆいち（福井市出身；1943—）

昭和32年、前衛書家宇野うのせつそん雪村に師事して前衛書の研鑽を積むとともに、30畳の仮設ステージ上での書初めやドライの砂漠でのヘリコプターを使用した個展開催など、数多くのスケールの大きいパフォーマンスを展開。その他、NHK大河ドラマ「武蔵」の題字や同局番組「ようこそ先輩・課外授業」への出演等でも話題を集めた。

【洋 楽】(合唱部門)

◆福井県合唱連盟の誕生

- ・ 昭和 30 年、福井市民合唱団の指導者田中^{たなかこうじ}滉二の呼びかけにより、福井県合唱連盟が設立され、同年5月、第1回福井県合唱祭が開催され、前年に作られた福井県民歌の全員合唱も行われた。
- ・ 昭和 33 年頃から、合唱技術も次第に向上し、県合唱コンクールを設けて県代表選抜を行い、代表団体は中部合唱コンクールで優れた合唱を披露した。合唱祭は、大野、勝山、芦原、鯖江、武生、敦賀等の地域においても開催され、県内地域の音楽文化振興に大きく貢献した。

◆福井国体の開催、県高等学校文化連盟の誕生と高校部活動の活発化

- ・ 昭和 30 年代後半から高校合唱部の活動が盛んになり、昭和 43 年の福井国体開催に向けた高校生主軸の国体合唱団の編成などを契機に一層活発化した。
- ・ さらに、昭和 46 年には、福井県高等学校文化連盟（高文連）が誕生し、高文連の会長が県合唱連盟の会長に就任するなど、県連盟における高校部活動の存在が大きくなっていった。

◆県内各地での「第九」演奏と合唱活動の発展

- ・ 昭和 50 年代に入り合唱活動はますます盛んになり、昭和 56 年の春季合唱際には過去最高の 35 団体が参加した。
- ・ また、「第九」演奏会の活動が活発に行われ、福井公演の団員は、昭和 57・58 年には 300 人を超え、昭和 60 年には、敦賀・鯖江・福井で3日連続、別々の合唱団による「第九」演奏会が行われる快挙もあった。

◆コンクールに見る本県の高いレベル

- ・ 本県合唱活動の実力の向上は、コンクールの成績に客観的に現れており、特に、中学校のレベル向上がめざましい。以下は、ここ 20 年の全国コンクールの成績である。
- ・ 全日本合唱コンクール全国大会については、高校では、昭和 60 年に仁愛女子高等学校が銅賞を、中学校では、平成 4,5,10,13 年に成和中学校が銀賞や銅賞を、平成 14 年に三国中学校が銀賞を、平成 18 年に鯖江市中央中学校が金賞を、平成 19 年には福井大学附属中学校が銀賞を受賞している。
- ・ また、昭和 63 年に、TBS こども音楽コンクールで鯖江中学校が全国 1 位となり、平成 17 年には、麻生津^{あそうづ}小学校が同コンクール文部科学大臣賞奨励賞を、平成 18 年には、同校がNHK全国学校音楽コンクールの銀賞を、附属中学校が同コンクールで、平成 18,20 年に優良賞を受賞している。

◆中・高校における活動者の減少

- ・ 本県の合唱分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 390 名、中学校・高校の部活動参加者が約 540 名で、合わせて約 930 名である。
- ・ 昭和 60 年前後から、中学・高校の部活動の参加者数が次第に減少し続けており、特に、男性の参加が急激に減少した。現在では、共学ながら男性部員がいない合唱部もめずらしくなく、現在の合唱活動における大きな課題となっている。

【洋 楽】(吹奏楽部門)

◆戦後の吹奏楽の動向

○福井国体の開催と吹奏楽の発展

- ・ 昭和 30 年、全日本吹奏楽連盟が設立され、翌年には中部日本吹奏楽連盟ができ、次に県域連盟の設立の働きかけが中部各県にあった。
- ・ 一方、戦後、中学校に新しく器楽教育が取り入れられ、県下中学校において次第に吹奏楽の活動の芽が育ち始めた。
- ・ こうした動きをベースに、昭和 34 年、福井市の成和、明道、進明、光陽、足羽の各中学校、三方、上中の両中学校に福井市消防音楽隊を加え、8 団体により福井県吹奏楽連盟が誕生した。
- ・ 昭和 36 年には、高校・中学校合わせて 12 校による県吹奏楽祭を開催、翌 37 年には全日本コンクールに成和中学校が初出場する等本県吹奏楽は次第に成長・発展していった。
- ・ 昭和 39 年頃には、平均して 20 名程度の編成によるバンドが、中学、高校、一般を含めて 47 団体設立され、各団体は楽器の購入と基礎練習に励み、その編成を大きくしていった。
- ・ その後、昭和 43 年開催の福井国体の式典等における吹奏楽団体出演の話が進み、昭和 40~41 年にかけて、数多くの講習会や練習会が開催され、また、県から各団体に多くの新しい楽器が配分される中で、各団体の技術水準が著しく向上した。

○県吹奏楽連盟への加盟状況

- ・ 福井国体の開催を契機に県内全域に普及した吹奏楽活動は、その後、中学校・高校の部活動を核として小学校にも浸透しゆき、一般のバンドも各地域で結成され、県吹奏楽連盟への加盟団体数は常に増加傾向を維持してきた。

《県吹奏楽連盟への加盟団体数の推移》

- ・ 昭和 53 年 (設立 20 周年時) 86 団体
- ・ // 63 // (// 30 //) 102 団体
- ・ 平成 10 // (// 40 //) 113 団体
- ・ // 20 // (// 50 //) 125 団体

◆コンクールに見る本県の高いレベル

- ・ 本県吹奏楽活動のレベルの高さは、コンクールの成績に客観的に現れている。

以下は、ここ 10 年の全国コンクール等の成績である。

- ・ 全日本吹奏楽コンクール全国大会については、中学校では、平成 15,16,18 年度に鯖江中学校が銅賞を受賞し、高校では、平成 11,12,14,15,17,19 年度に武生東高等学校が銀賞や銅賞を受賞。一般では、平成 16 年度にソノーレ・ウインドアンサンブルが銅賞を、平成 20 年度にウインドアンサンブル・ソレイユが銀賞を受賞している。
- ・ また、全日本アンサンブルコンテストについては、中学校では、平成 11 年度に中央中学校が銀賞を、平成 14,15,16,18,19 年度に鯖江中学校が金賞や銀賞を、平成 14 年度に武生第二中学校が銀賞を、平成 18 年度に美山中学校が金賞を受賞し、高校では、平成 11,12,15,18,19 年度に金賞や銀賞を受賞。
大学では、平成 10 年度に福井大学が銀賞を、平成 19 年度に仁愛女子短期大学が銀賞を受賞し、一般では、平成 14 年度にソノーレ・ウインドアンサンブルが銀賞を受賞している。

◆増加傾向をたどる吹奏楽人口

- ・ 本県の吹奏楽分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が 200 名強、中学校・高校の部活動が約 3,900 名で、合わせて 4,100 名余りで、今なお増加傾向にある。特に中学生、高校生の参加者が増えており、どの学校においても 5~10% の生徒が吹奏楽部に所属している。

【洋 楽】(室内楽・管弦楽部門)

◆戦後の室内楽・管弦楽の動向

[一般・大学]

○福井交響楽団

- ・ 昭和 62 年、浦井和美らの提唱により、福井室内合奏団、福井市交響楽団の発展的解消により、団員 100 名を擁する新しい福井交響楽団が設立。設立当時、県からの大型楽器購入等に対する支援や、その後、拠点施設として県立音楽堂の設置等もあり、毎年定期演奏会、特別演奏会等を行う大曲指向型のオーケストラに発展している。

[福井室内合奏団]

昭和 42 年、福井大学の中に、フルート奏者で常任指揮を務める浦井や福井大学フィルハーモニー管弦楽団で石黒硯二郎や棚池慶介の指導を受けた弦楽器奏者 15～16 名により福井室内合奏団が設立。バロックコンサートやクリスマスコンサート等の演奏会を開催し意欲的に活動した。

[福井市交響楽団]

昭和 49 年、大学のオーケストラとは別に、固定メンバーによるオーケストラの創設が望まれ、坪川健一氏を団長に福井市交響楽団(団員約 50 名)が誕生。毎年国内一流の演奏家の客演を迎えて定期演奏会を開始するなど意欲的に活動した。

○福井室内管弦楽団

- ・ 平成元年、清水八洲男の提唱により、主としてバロック、古典派の作品を研究する目的で設立。年 1 回の定期演奏会のほか、県内各地での出前コンサートや病院、図書館、美術館、小学校、幼稚園、保育園等を会場に小編成のアンサンブルによるコンサートを開催するなど活発に活動している。

○福井大学フィルハーモニー管弦楽団

- ・ 昭和 31 年頃に設置。当時高校教員であった石黒らの指導により活動が始められた。以降、毎年定期演奏会を行うなど 50 年以上の活動歴がある。

○福井大学医学部管弦楽団

- ・ 平成元年、福井医科大学管弦楽団として設立。同大学と福井大学との合併により名称変更。毎年定期演奏会を行っている。

[高校]

○丹生高校オーケストラ部

- ・ 昭和 43 年に、清水逸之が設立。本県で最も古い高校オーケストラ

○武生高校オーケストラ部

- ・ 昭和 58 年に、同校に異動した清水逸之が設立

○藤島高校弦楽部

- ・ 平成 7 年に、清水八洲男が設立

○高志高校弦楽部

- ・ 同好会からの昇格により平成 15 年に設立

[ジュニア]

○福井ジュニア・オーケストラ

- ・ 昭和 54 年、国際児童年を記念し、福井の音楽文化の向上と若い世代の育成を目的に、県内唯一の本格的な子どもオーケストラとして福井ジュニア・オーケストラが設立された。
- ・ 昭和 57 年には、ウィーンモーツァルト少年少女合唱団福井公演に特別出演する等の活動を行ったが、その後、諸事情により解散した。

◆国民文化祭の開催と福井県オーケストラ連盟の設立

- ・ 国民文化祭・ふくい 2005 の前年、平成 16 年に、県内のオーケストラ部門の統括的団体として福井県オーケストラ連盟が設立された。
- ・ 同祭では、当該連盟が主体となって、以下の各部門合同でオーケストラの祭典を実施
 - 高校部門（藤島、高志、武生、丹生の 4 校合同）
 - 大学部門（福井大学フィルハーモニー管弦楽団を中心に北陸各県からの参加者で構成）
 - 一般部門（福井交響楽団、福井室内管弦楽団に加えて他県からの参加者で構成）
- ・ 連盟は、国民文化祭の後、目立った活動は行っていない。

◆弦楽器人口の不足

- ・ 本県の管弦楽の活動者人口は、一般・大学が約 200 名、高校生が約 100 名である。
- ・ このうち、弦楽器奏者は、一般・大学が約 110 名、高校生が約 80 名であるが、本県は、弦楽器人口が少なく、オーケストラの要である弦楽器について、質量ともに確保できていない状況にある。

このため、全県的に弦楽器奏者の育成が課題となっている。

【邦 楽】

邦楽は、雅楽、箏、三味線、尺八、長唄、能楽・狂言の囃し方等様々な部門があるが、ここでは、県民の参加者が最も多い三曲（箏・三味線・尺八）を中心にまとめた。

◆戦後の邦楽活動の動向 ～福井県邦楽連盟の創設～

- ・ 昭和 25 年、県教育委員会 2 周年記念と題した邦楽鑑賞大会の出演者から、各流派合同の演奏会を持つことが各流派に刺激を与え演奏会にも変化を与えることとなるから、邦楽家の横の連携を保ちうるような組織がほしいとの要望があった。
- ・ この要望を踏まえ、県文協などが中心となって福井県邦楽連盟が結成され、各流派合同演奏会が開催されるようになった。合同演奏会の参加団体数増加により、2 日間開催や昼夜連続開催、年 2 回開催等の工夫が講じられたのは、戦後の邦楽活動発展の表れの 1 つとして考えられる。しかし、本連盟は昭和 30 年代後半に、諸事情により自然消滅した。

◆福井県三曲協会と福井県三曲会

- ・ 昭和 40 年に、本県三曲部門の横断的な組織として県三曲会が設立されたが、昭和 40 年代の後半から活動が停滞し休眠状態にあったものを何とか復活しようと昭和 52 年 9 月に再発足し、翌年、「福井県三曲協会」と改称し、定期演奏会、研究会、講習会等を重ねる中で、会員の技術向上が図られている。
- ・ また、昭和 53 年 4 月には、都山流、生田流宮城社、生田流正派邦楽会および諸派が集まり「福井県三曲会」を設立。箏、三絃、尺八、十七絃の各流派が、毎年 1 つの舞台で、全員で大合奏を繰り広げることはほかに類例がないことであり、本県が全国に誇れる画期的な活動となっている。

◆邦楽人口の減少と子どもたちの邦楽活動への参加

- ・ 本県の邦楽分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 1,400 名、高校の部活動参加者が約 130 名で、合わせて約 1,530 名である。
- ・ 本県邦楽界全体としては、若年層の参加者が減少し高齢化が進み、円滑な世代交代が 1 つの課題となっている中、日本の伝統の音を次代に伝えるため、子どもたちの邦楽活動への参加を積極的に進めている団体もある。
- ・ 一例として、昭和 27 年設立の越前市に拠点を置くアララギ楽苑では、4、5 歳児から中学生まで約 20 名の子どもたちが楽しみながら練習・発表活動を行うとともに、市内の小学生幼稚園、味真野小学校、花筐小学校、南小学校の箏クラブの指導を行ったり、幼稚園児、小中学生を対象とした体験学習の中で広く和楽器の楽しさを体験してもらおう活動を続けており、本県の邦楽文化の継承・発展にとって貴重な役割を担っている。

本県出身・ゆかりの著名な音楽家 (追記)

○^{こまつちやうせい}小松長生 (指揮者。三国町出身・フロリダ州在住；1958ー)

東京大学美学芸術学科、イーストマン音楽院大学院指揮科を卒業後、昭和60年にエクソン指揮者コンクールに優勝。その後、ウクライナのリヴォフ国立歌劇場首席客演指揮者、東京フィルハーモニー交響楽団正指揮者、セントラル愛知交響楽団音楽監督、コスタリカ国立交響楽団等を歴任

平成6年にはザルツブルク音楽祭にデビュー。モントリオール交響楽団、モスクワ放送交響楽団、ポリショイ劇場、プラハ放送交響楽団などにも客演。オペラやジャズ、現代曲、雅楽、ポップス、教育プログラムのプロデュース等ジャンルを超えて広汎に活躍

○^{とだやよい}戸田弥生 (ヴァイオリニスト。福井市出身；1968ー)

4歳からヴァイオリンを習い始め、昭和60年、桐朋女子高校音楽科在学中に日本音楽コンクールで第1位を受賞。桐朋学園大学音楽科を首席で卒業

その後、平成5年、エリザベート王妃国際音楽コンクールに優勝して注目を集め、以来、国内外で本格的な活動に入る。これまでにニューヨーク・チェンバー・オーケストラ、モスクワ・フィルハーモニー管弦楽団、ロンドン・フィルハーモニー管弦楽団等の楽団や小澤征爾、ユーリー・シモノフ、スタニスラフ・ブーニン、マルタ・アルゲリッチ等の超一流アーティストと共演している。

平成18年から同志社女子大学音楽学部非常勤講師

○^{さいとういちろう}齊藤一郎 (指揮者。大野市出身・東京都在住；1969ー)

東京学芸大学を経て東京藝術大学指揮科を首席で卒業。平成9年から岩城浩之のアシスタントを務めるとともに、同年、大阪センチュリー交響楽団を指揮してデビューし絶賛を博した。その後、平成14年にNHK交響楽団を指揮し、平成17年にはスロヴァキアフィルの定期公演を指揮していずれも大成功を収めた。これまでに、大阪フィルハーモニー交響楽団、東京交響楽団、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、札幌交響楽団等主要オーケストラに客演

平成21年4月からセントラル愛知交響楽団常任指揮者に就任予定

○^{いまがわひろよ}今川裕代 (ピアニスト。福井市出身・ザルツブルク在住；1975ー)

シュトゥットガルト国立音楽大学およびザルツブルグモーツアルテウム国立音楽大学修士課程を首席卒業。シューベルト国際ピアノコンクール第2位、ブラームス国際音楽コンクール第2位、サレルノ国際ピアノコンクールでは優勝と併せて最優秀ドビュッシー演奏賞を受賞

これまでに、レニングラード国立歌劇場管弦楽団、チェコ国立プルノフィル、東京フィルハーモニー交響楽団、新日本フィルハーモニー交響楽団、大阪センチュリー交響楽団等と共演。平成20年には、ドイツ・モーゼル音楽祭出演やアルメニアフィル日本公演のソリスト等を務め、好評を博した。

○^{かわむらふみお}川村文雄 (ピアニスト。丸岡町出身・東京都在住；1978ー)

5歳からピアノを習い始める。桐朋学園大学在学中から日本音楽コンクールや東京音楽コンクールなどの国内コンクールで入賞。同大学音楽部演奏学科を首席で卒業。以後、マリア・カナルス国際音楽コンクールピアノ部門第3位、ポツォーリ国際ピアノコンクール最高位を受賞。これらの実績を認められ、江戸川区文化奨励賞を受賞

近年は、現代曲の国内初演やテレビドラマの吹き替え・演技指導などにも積極的に取り組み、その傍ら、同郷の作曲家である^{いまがわせつ}今川節の音源化プロジェクトにも携わっている。

現在、桐朋学園大学音楽学部および洗足学園音楽大学ピアノ科非常勤講師

【演 劇】

◆戦後の演劇文化の動向

- ・ 戦後、本県の演劇は、NHK 福井放送局の放送劇で活動した「福井アンテナクラブ」に始まる。当時放送部長であった高野国本たかのくにもとの指揮の下、坪川健一つぼかわけんいち脚本の連続放送劇で活躍。その後、舞台劇進出という高野の強い意向により、「福井アンテナクラブ」を母体に「劇団福井自由舞台」が誕生。現在も本県演劇界の中核を担う劇団となっている。

◆宇野重吉の帰郷・滞在と演劇レベルの向上

- ・ 昭和 46 年、本県出身の宇野重吉が帰郷滞在し、福井の演劇人を結集した作品を上演することとなり、「福井自由舞台」・「福井劇の会」・「福井青年劇場」の合同で毎晩のように稽古が行われた。作品は、県と福井市が助成する演劇の里事業として上演された。
- ・ 演劇の里事業は、劇団合同公演や創作バレエとの共演、演出・演技・照明技術等の講習会など、当時画期的な内容で昭和 49 年まで続けられ、演劇分野の技術レベルの向上に大きく貢献した。

◆福井県演劇連盟の設立

- ・ 越前市での演劇講習会開催を契機に県内の演劇グループが結集し、平成 4 年に福井県演劇連盟が結成された。平成 7 年、仁愛女子高校 OG による「劇団 Jin」じんを中心とした 8 劇団合同公演で反響を呼び、また翌年、ハートピア春江はるえを会場に全国アマチュア演劇大会福井大会を開催するなど、横のつながりによる活発な活動を展開し、本県演劇文化の発展を推進している。

◆平成以降近年の小劇場志向

- ・ 平成 3 年頃、老人介護など問題提起的な創作劇や前衛的な作品に取り組む劇団も現れ始め、現在は、大作や人気劇を大規模会場で上演するより、演じる側がやりたい劇を“アトリエ”や“小屋”と呼ばれる小劇場で上演する中で個性を追求する劇団が増える傾向も見受けられる。

◆子ども演劇部門の活躍

- ・ ミニ劇場や演劇ワークショップで活動の幅を広げる大野市の「劇団チャップス」、地元旧美山町の民話劇を上演する「みやま木ごころ一座」、旧今立町内の小・中・高校生が毎年ミュージカル公演を行う「いまだて子どもミュージカルステラ座」、寄贈された大阪道頓堀中座の緞帳などを活かして行う「まるおか子供歌舞伎」など、活発な活動を行う子ども参加の劇団もある。

◆演劇分野の活動者人口

- ・ 本県の演劇分野の活動者人口は、大学生も含む一般社会人が約 170 名、中学校・高校の部活動参加者が 190 名余りで、合わせて約 360 名である。
- ・ 演劇分野の活動者人口は、ここ 5 年間は横ばいであるが、どの劇団も慢性的な団員不足であり、また、若年層の参加が少なく、世代交代と後継者確保が最大の課題となっている。

【文 学】

詩

のりたけかずお

◆則武三雄の詩と北荘文庫

- ・ 則武三雄は明治 42 年米子市の生まれ。終戦後間もなく三国町に滞在中の三好達治を訪ねて師事し、後に福井市に移住して文学活動を開始。昭和 26 年に「北荘文庫」を創設し、自身の詩集や県内詩人の詩集等を出版して本県詩人を支援。本県詩文化の発展に貢献し、県内外で注目された。

◆「木立の会」の活動

- ・ 昭和 43 年、広部英一ひろべえいいちを代表に、岡崎 純おかざきじゆん、南信雄みなみののぶお、川上明日夫かわかみあすおによって「木立ちの会」が発足し、詩誌「木立ち」が創刊。北陸の風土や生活に根ざした定住者の文学を目指した同誌には、多くの優れた福井在住詩人の参加があり、“福井抒情派”などと呼ばれ、全国的に高く評価されている。

◆全国規模での活躍と荒川洋治

- ・ 昭和 50 年代には、本県詩人が全国的にも評価されるようになり、「木立ちの会」の詩人をはじめ全国的に権威ある詩賞を受賞する者も現れた。
- ・ そうした中、三国町生まれの荒川洋治あらかわようじが新しい詩の世界と積極的な問題提起で注目され、全国規模で活躍。昭和 51 年、詩集「水駅」で H 氏賞を受賞。以後、多くの詩集や随筆、評論を発表し、高見順賞、読売文学賞、萩原朔太郎賞、小林秀雄賞等を受賞。現代詩の第一人者となった。

◆「福井県詩人懇話会」の誕生

- ・ 昭和 60 年、詩分野の県域連盟として「福井県詩人懇話会」が設立。県内の全同人誌が参加し、個人的に活動する人や愛好者等も広く参加可能な開かれた団体として活動。岡崎純を代表に、年刊「ふくい詩集」の発行、「ふくい詩祭」の開催等の活動を通じて本県詩文化の発展を推進している。

俳 句

◆戦後の俳句文化の動向

いとうはくすい

かちょう

○伊藤柏翠と俳句誌「花鳥」の復刊

- ・ 戦後の本県俳壇は、昭和 20 年から三国町に住む「ホトトギス」同人の伊藤柏翠の俳句誌「花鳥」の復刊（戦前は療養先の鎌倉で発刊）に始まる。
- ・ 「花鳥」は、戦後、本県の伝統俳句の発展に大きく貢献。平成 8 年には、全国展開を目指して東京に発行所を移し文字通り全国俳句誌となった。平成 10 年当時で県内会員数 250 名、県外 820 名、県内の系列句会の数は 23 句会にも及び、伊藤は多くの優秀な俳人を生み出したが平成 11 年に死去。柏翠の句碑は全国に建立されている。

○公民館教室による俳句の発展

- ・ 昭和 24 年頃から国が社会教育を推進し全国に公民館が普及。福井市の各公民館が俳句教室の開設に取り組み始めた頃、牧田雨煙樹まきたうえんじゆや石川銀栄子いしかわぎんえいしらが集まり、各派を超えて俳句に関心のある人が気軽に参加できる句会を公民館活動として開設することで意見がまとまり、「福井市民俳句会」が設けられた。5・7・5 の定型派と自由律の人が合同で 1 つの句会を開くことは全国でもめずらしく画期的な出来事であり、その後の公民館教室による俳句の普及発展に大きく貢献した。

◆「福井県俳句作家協会」の設立

- ・ 昭和 33 年、県下俳壇の団結について意見が交わされ、「福井県俳句作家協会」が設立された。以来 50 年にわたり、春秋 2 回の県下各派合同俳句大会の開催や各派合同句集「福井県」の発行等、公民館等における俳句教室の発展と併せて、本県俳句文化振興の基礎を築いてきた。

◆県 4 団体による俳句文化の振興

- ・ 平成 5 年に「福井県現代俳句協会」が、平成 6 年に「俳人協会福井支部」と「日本伝統俳句協会福井部会」が、中央の主要 3 団体の支部組織としてそれぞれ設立され、前述の「福井県俳句作家協会」の活動と併せて、本県の俳句文化の振興・発展を推進している。

短歌

◆戦後の短歌文化の動向

○短歌誌「ひいらぎ柎」と「ひやくじつこうしゃ百日紅社」

- ・ 戦後、本県の短歌界において主流をなしてきたのは、北陸アララギ会を母体とする「つじ柎」と辻もりしゅうえい森秀英を主宰とする「百日紅社」である。

「柎」は、正岡子規門下生による中央同人誌「アララギ」の地方誌として平成 4 年に創刊。戦後、昭和 21 年に復刊第 1 号を出版。本県出身の「アララギ」同人吉田正俊よしだまさとしが平成 5 年に他界するまで選者を務めた。創刊当時約 100 名の会員は、現在 200 名を超えている。

- ・ 昭和 22 年に、早稲田大学での窪田空穂くぼたうつほの教え子で本県に疎開中の辻森と若山牧水系の伊藤二三雄らが中心となり「百日紅社」を創設。清新な抒情と自由な歌風が若い世代の共感を呼び、会員が増加した。創刊当時 25 名の会員は、現在約 90 名となっている。

◆福井県短歌人連盟の設立

- ・ 昭和 30 年、福井県文化協議会主催の短歌大会が各派合同組織設立の気運を高め、昭和 32 年、福井県短歌人連盟が設立。現在に至るまで、毎年春・秋 2 回の総合短歌大会と橘たちばなあけみ曙覧忌短歌大会を行うほか、毎年自選歌集を刊行し、本県短歌文化の発展を推進している。

川柳

◆戦後の川柳文化の動向と番傘ばんがさばんばせんりゅうしゃ川柳社の創設

- ・ 本県の川柳界は、敦賀生まれの舟木夢考ふなきむこうが、大正 6 年、源田琴波らときてきせんりゅうかい「汽笛川柳会」を創設、柳誌「汽笛」（その後「かもめ」に改名）を創刊したことに始まる。
- ・ 一方、福井では、昭和 27 年、川崎銀甲かわさきぎんこうらが敦賀の川柳界の協力を得てふくいばんがさせんりゅうかい「福井番傘川柳会」を創設、柳誌「福ばん」を発行。その後、誌名を「ばんば」（雪国の除雪用民具ばんばより命名）と改め、敦賀と福井が車の両輪となって福井県川柳界をリードした。
- ・ 死去した舟木の遺志により、昭和 37 年、県内の各川柳社が統合し、番傘ばんば川柳社を創設。敦賀の柳誌「かもめ」と福井の「ばんば」を併合して「ばんば」を継続発行。本県川柳界の大同団結が成り、全国にも稀な川柳界の一大結社が誕生。現在も本県の川柳文化発展を推進している。

共通事項

◆短詩型文学の活動者人口の減少

- ・ 現在、詩・短歌・俳句・川柳の短詩型文学の新たな活動参加者は、概して定年退職者層を中心で、

昭和20・30年代に見受けられた教師の影響による高校生の参加や若年層の参加はほとんどない。高齢化・後継者不足が共通した状況といえる。

- ・ 活動者数については、詩と俳句が横ばい状態。川柳は昭和35年頃、短歌は平成10年頃をピークに減少してきている。

◆短詩型文学への子どもたちの参加

- ・ 本県の短詩型文学の活動者数については、詩・短歌・俳句・川柳合わせて約2,600人である。
- ・ 円滑な世代交代と後継者確保のためには、子ども対象に普及を図る機会が必要であるが、様々な情報、感情等を巧みに短文化し表現できるメール世代の今の若者こそ、感覚的に短詩型文学の世界と共通する部分を潜在的に有しており、この点で後継者育成の可能性を示唆する活動者もいる。

本県で行われている主要な文学コンクール（追記）

《総合》

◆福井県文学コンクール

- ・ 文芸7部門（創作、詩、短歌、俳句、川柳、童話、漢詩）合同開催の文学コンクール
- ・ ふくい文芸の会が実施。毎年300前後の応募がある。

《創作》

◆ふくい新進文学賞

- ・ 福井県出身か県内在住の30歳以下の新進気鋭の新人作家の発掘を目的とした文学賞
- ・ 日刊県民福井が実施。毎年数十点の応募がある。

《随筆》

◆風花随筆文学賞

- ・ 津村節子氏の随筆「かざはな風花の街から」にちなんだ名称を冠した全国公募の随筆文学賞
仁愛女子短期大学に「津村節子文学室」が開設されたのを機に、平成9年度、同学に創設。同学国文学科廃止に伴い、平成14年度から「風花随筆文学賞」実行委員会を設立して実施している。
- ・ 一般の部・高校生の部を合わせて県内外から約4,000点を超える応募がある。

◆のこすことば文学賞

- ・ 明治43年、潜水艇の沈没事故に遭遇しながらも、事故原因を明らかにするとともに乗組員の家族を気遣う遺書を残した若狭町出身の佐久間勉艦長を顕彰する随筆文学賞
- ・ のこすことば文学賞実行委員会（パレア若狭（若狭町文化振興課内））が実施。毎年1,000点弱の応募がある。

《詩》

◆蟹と水仙の文学コンクール

- ・ 「越前がに」と「越前水仙」のふるさとにふさわしい町づくりを一層進めるため、「蟹」と「水仙」を題材にした「詩」と「俳句」の全国コンクール
- ・ 越前町が実施。毎年約7,000点の応募がある。

《短歌》

◆平成独楽吟^{へいせいどくらくぎん}

- ・ 本県出身の歌人橘曙覧が詠んだ独楽吟にちなんだ全国公募の短歌コンクール
「楽しみは～」で始まり「～とき」で終わる独楽吟形式の短歌を「平成独楽吟」として募集している。
- ・ (財)歴史のみえるまちづくり協会(福井市役所内)が実施し、一般短歌と合わせて毎年約4,000点の応募がある。

◆万葉の里短歌募集・あなたを想う恋の歌

- ・ 奈良時代、味真野に流された中臣朝臣宅守(なかとみのあそみやかもり)と都で宅守を想う妻の狭野弟上娘子(さののおとがみのおとめ)が交わした63首の相聞歌^{そうもんか}にちなんだ全国公募の恋の歌(短歌)コンクール
- ・ 万葉の里・恋のうた募集実行委員会(越前市文化センター内)が実施。毎年15,000点以上の応募がある。

◆若狭を謳う^{やまかわとみこ} 山川登美子記念短歌大会

- ・ 小浜市出身の歌人山川登美子を顕彰する短歌コンクール
- ・ 「若狭を謳う」実行委員会(小浜商工会議所内)が実施

◆「美浜を詠う」短歌コンクール

- ・ 美浜の自然、風土、名所、名物、人等あらゆるものをテーマとした全国公募の短歌コンクール
- ・ 美浜を詠う実行委員会(美浜町内)が実施。毎年500~600点の応募がある。

《俳句》

◆蟹と水仙の文学コンクール(再掲)

- ・ 「越前がに」と「越前水仙」のふるさとにふさわしい町づくりを一層進めるため、「蟹」と「水仙」を題材にした「詩」と「俳句」の全国コンクール
- ・ 越前町が実施。毎年約7,000点の応募がある。

◆「奥の細道」つるが芭蕉紀行全国俳句大会

- ・ 「奥の細道」終焉の地である敦賀における全国俳句大会
- ・ 「奥の細道」つるが芭蕉紀行全国俳句大会実行委員会(港都つるが^港内)が実施。毎年3,000句以上の投句がある。

◆福井県俳句大会

- ・ 県内各派が合同で行う総合俳句コンクール
- ・ 福井県俳句作家協会が実施。毎年、春・秋併せて約2,000句の投句がある。

◆一乗谷朝倉氏遺跡吟行大会

- ・ 一乗谷朝倉氏遺跡を題材とした公募俳句大会

- ・ 一乗谷朝倉氏遺跡活用推進協議会が実施。毎年 100 弱の投句がある。

《川柳》

◆福井県川柳大会

- ・ 県内各派が合同で行う総合川柳コンクール
- ・ 川柳の統括的団体である福井番傘ばんば川柳社が実施。毎年 2 千数百点の応募がある。

《その他》

◆新一筆啓上賞

- ・ 丸岡町文化振興事業団が実施する日本一短い手紙文の全国公募のコンクール
- ・ 同町にゆかりのある徳川家康の忠臣本多重次ほんだしげつぐが陣中から妻にあてて送った手紙「一筆啓上 火の用心 お仙泣かすな 馬肥やせ」にちなむもの。「お仙」とは、後の越前丸岡藩主 本多成重ほんだなりしげ (幼名仙千代せんちよ) のこと。平成 20 年度で第 6 回を数え、応募数は通算 100 万を超えた。

本県出身の文学者等にちなんだ取組み

◆鯖江人形浄瑠璃「近松座」

- ・ 浄瑠璃作家として元禄文化を築いた近松門左衛門が、本県鯖江市立待吉江たぢまちよしえで幼少期を過ごした史実を基に、地元の人形浄瑠璃劇団を立ち上げ、平成 17 年、「第 20 回国民文化祭・ふくい 2005 県民自主企画事業」として公演が実現し、継続が図られている。

◆竹人形文楽「越前竹人形」

- ・ 本県おおい町出身の作家水上勉みずかみつとむの蔵書約 2 万冊等を所蔵する「若洲一滴文庫」じゃくしゅういつてきぶんこで上演される「若洲人形座」じゃくしゅうにんぎょうざによる竹人形文楽「越前竹人形」。昭和 61 年に旗揚げされ、毎年おおむね 2 回の公演を行い、四半世紀近くになる。

本県出身の近代以降活躍の著名な文学者 (追記)

◆創作・随筆・児童文学・評論

○中野重治なかのしげはる (小説家、政治家、詩人。丸岡町出身；1902—1979)

四高時代に、短歌や詩や小説を創作・発表。東大入学後、堀辰雄ほりたつおらと「驢馬」ろばを創刊。一方でプロレタリア文学運動に参加し、この間に多くの作品を発表。

戦後、平野謙ひらのけん、荒正人あらまさとらと「政治と文学論争」を引き起こし、戦後文学を確立させた。代表作に、小説「むらぎも」、「梨の花」、「歌のわかれ」、詩集「中野重治詩集」などがある。

○桑原武夫くわばらたけお (仏文学者、評論家。敦賀市出身；1904—1988)

5 歳のとき、父親の京都帝国大学教授就任によって京都に移住。京都帝国大学文学部を卒業後、三高、東北大学などの教職を経て、京都大学教授に就任。仏文学の紹介や研究、文明批評で活躍。特に、第 2 次大戦後、独自の文化論を展開し、「第二芸術—現代俳句について」(「世界」昭和 21 年)で、その未完結性から現代俳句を「第二芸術」であると論じて賛否両論の反響を呼んで話題となった。

○高見 順たかみ じゆん（小説家、詩人。三国町出身。本名 高間芳雄たかまよしお；1907－1965）

中学時代から白樺派に惹かれ、東京帝国大学に進むと左翼芸術同盟に参加し、機関誌「左翼芸術」などに作品を発表。大学卒業後はレコード会社に勤務の傍ら、プロレタリア作家として活動するが、その後転向した。昭和 10 年“饒舌体”と呼ばれる手法で「故旧忘れ得べき」を著わし、第 1 回芥川賞候補となる。晩年は、昭和という時代を描く「激流」、「いやな感じ」、「大いなる手の影」の連作を構想し執筆にとりかかったが、昭和 40 年、58 歳で死去

○山本和夫やまもとかずお（児童文学者、詩人。小浜市出身；1907－1996）

中学時代から詩作を始め、東洋大学在学中に乾直恵らと「白山詩人いぬいなおえ」を創刊し活躍。詩のほか「燃える湖」（昭和 39 年、第 13 回小学館児童文学賞）をはじめとする児童文学作家としての作品も多く、さらに近代文学研究家として、評論家として幅広く活動

○いわさきちひろまつもとちひろ（童画家、絵本作家。越前市出身。本名 松本知弘；1918－1974）

“子どもの平和としあわせ”を生涯のテーマとし、“にじみ”と余白を生かした淡い色調の子どもの絵が国際的にも評価され、十数か国で絵本が出版。現在も女性を中心に幅広い層から支持を得ている。

昭和 47 年にポローニャ国際絵本展・グラフィック賞受賞。没後の昭和 52 年、いわさきちひろ絵本美術館（現ちひろ美術館（東京都練馬区））が設立

○水上 勉みずかみ つとむ（小説家。おおい町出身；1919－2004）

9～10 歳の頃、京都の臨濟宗寺院で修業。寺を出た後、様々な職業に就きながら小説を書き、昭和 22 年の処女作「フライパンの歌」がベストセラーとなった。昭和 35 年に、水俣病を題材にした「海の牙」で日本探偵作家クラブ賞を受賞。社会派推理作家として認められた。

また、同年「雁の寺」で直木賞を受賞。その後、「飢餓海峡」、「越前竹人形」、「はなれ瞽女こぜおりん」、「五番町夕霧楼ごばんちょうゆうきりろう」などに加えて、童話「ブンナよ、木からおりてこい」や数々のエッセイなどを旺盛な文筆活動を続けた。平成 16 年、長野県東御市とうみで死去。

○加古里子かこさとし（絵本作家、児童文学者、工学博士。越前市出身・東京在住。本名 中島 哲なかしま さとし；1926－）

東京大学応用化学科卒業後、民間会社で研究職を務める傍ら、絵本創作、人形劇、紙芝居などの活動を行う。47 歳で退社した後はフリーで活動し、ユーモラスな絵本から、「かわ」、「たいふう」などの科学絵本、昔ながらの日本文化を描き留めた絵本に至るまで、幅広い作風を誇る。「とこちゃんはどこ」は「ウォーリーをさがせ!」のはるか先駆を成す作品として知られている。

平成 20 年に菊池寛賞受賞

○津村節子（小説家。福井市出身・東京都在住。本名 吉村節子；1928－）

学習院大学時代から少女小説ジャンルで連載開始。ティーン世代を中心に人気を博した。

昭和 28 年、学習院で文芸部の仲間だった小説家の故吉村昭よしむらあきらと結婚。吉村とともに、丹羽文雄主宰の同人誌「文学者」などに参加し作品を発表。

昭和 40 年「玩具」で芥川賞を受賞。女流文学者で同賞の受賞は当時珍しく話題となり「玩具」はベストセラーとなった。

平成 10 年に芸術選奨文部大臣賞、平成 11 年に福井新聞文化賞、平成 12 年に女流文学賞、平成 15 年に日本芸術院賞を受賞。日本芸術院会員

やまざきみつお
○山崎光夫（小説家。福井市出身・東京都在住；1947—）

早稲田大学卒業後、放送作家や雑誌記者を経て小説家に。医療分野における豊富な知識を活かし、主に医学薬学関係の小説、ノンフィクション、エッセイを発表。常に新しい角度から現代社会を捉え直した作品に定評がある。

「藪の中の家―芥川自死の謎を解く」で新田次郎文学賞、「安楽処方箋」で小説現代新人賞を受賞

ふじたよしなが
○藤田直永（小説家。福井市出身・東京都在住。夫人は直木賞作家の小池真理子；1950年—）

早稲田大学中退後フランスに渡り、帰国後、フランスのフィルム・ノワールを思わせるような犯罪小説や冒険小説を手がける。その後、主に推理小説および恋愛小説を執筆するようになり、都会的なセンスと人情の機微を描く優れた心理描写で、熟年の愛を描いた『愛の領分』にて第12回直木賞を受賞。

つきやま けい
○築山 桂（小説家。京都府出身・福井市在住；1969—）

大阪大学大学院修了後、時代小説の作家活動を行うとともに、歴史研究を行っている。

NHK 土曜時代劇『浪花の華―緒方洪庵事件帳―』の原作者。

かつら ひじん
○桂 美人（小説家。越前町出身・横浜市在住；1973—）

専修大学商学部卒業後、会社勤めの傍ら作家活動を行い、平成19年、ミステリー小説の新たな才能を発掘する「横溝正史ミステリー大賞」を受賞。最も期待される若手ミステリー作家の一人となっている。

まいじょうおうたろう
○舞城王太郎（小説家。南越前町（旧今庄町出身）・東京都在住；1973—）

学歴・職歴は非公表の覆面作家。ミステリー小説「煙か土か食べ物」で第19回メフィスト賞を受賞しデビュー。その後「暗闇の中で子供」、「世界は密室でできている。」などを発表。洋書のようなカバーデザインと特異な文体・物語の構成力で高い評価を浴びた。

平成13年、短編「熊の場所」以降は純文学にも活動の幅を広げ、平成15年に「阿修羅ガール」で第16回三島由紀夫賞を受賞。「好き好き大好き超愛してる。」は芥川賞候補作になった。

すずめのひなこ なかしまかずよ
○雀野日名子（小説家。福井市出身・同市在住。本名 中島和代；1975—）

大阪外国語大学卒業後、平成18年ジャイブ小説大賞入選。平成19年に「あちん」で「幽」怪談文学賞短編部門大賞を受賞し、平成20年に同作でデビュー。同年、「トンコ」で第15回日本ホラー小説大賞短編賞受賞

たにざきゆい
○谷崎由依（小説家。福井市出身・京都府在住。1978—）

京都大学大学院文学研究科修士課程修了後、在宅でミステリー小説の翻訳や校正を手がける。

平成14年に「夕暮れ畑」で第95回文学界新人賞最終候補。平成19年に「舞い落ちる村」で第104回文学界新人賞受賞

◆詩

○荒川洋治（三国町出身・東京都在住；1949—）

高校2年の冬、詩誌「とらむべつと」を創刊し全国の高校生100余名が参加。その後、福井在住

の詩人則武三雄、広部英一、岡崎純、南信雄、川上明日夫らの指導を受け、早稲田大学在学中の昭和46年、第一詩集『娼婦論』を刊行、注目を集めた。

大学卒業後、都内の編集会社に勤務の傍ら自宅で出版社を始め、新人の詩集を刊行した。

昭和55年、編集会社を退社し文筆に専念。昭和40年にH氏賞、平成9年に高見順賞、平成11年に読売文学賞を受賞

◆短歌

○山川登美子（小浜市出身；1879－1909）

大阪の梅花女学校卒業後、与謝野鉄幹創立の短歌結社「東京新詩社」に加入。機関誌「明星」を舞台に、白百合の雅名でおおとり鳳（のちの与謝野）晶子と歌才を競った。夫との死別後、日本女子大学に入学。「明星」で再起したが肺病を患い、中退して郷里小浜で療養。明治42年に29歳で死去

○俵たわら万智まち（大阪府出身。越前市在住歴あり。宮城県在住。；1962－）

早稲田大学在学中から短歌を作り始める。ささぎゆきつな佐々木幸綱に師事し、昭和61年、「八月の朝」で角川短歌賞を受賞、歌壇の話題をさらう。昭和62年、第一歌集「サラダ記念日」が空前の大ベストセラーとなった。日常会話で使われるカタカナ語を巧みに使い、親しみやすい歌風が多くの人々の心を掴み、口語短歌の裾野を一気に広げた。

◆俳句

○伊藤柏翠いとうはくすい（東京都出身；1911－1999）

鎌倉での療養生活中に俳句に傾倒。高浜虚子に師事し、その後福井県三国町の俳人・森田愛子との出会いが縁で明治45年に同町に移住。人生の大半を過ごし「永平寺」、「虹」、「花鳥」など多くの句集を発表。「ホトトギス」の流れを汲む全国的な俳句結社「花鳥」を主宰するとともに、日本伝統俳句協会副会長なども務めた。平成11年に88歳で死去。

○森田愛子もりたあいこ（三国町出身；1917－1947）

三国高等女学校を経て東京の女子大学へ進学。鎌倉での療養生活で伊藤柏翠に出会い俳句を始めた。同時に高浜虚子とも出会い、虚子は彼女の生涯の師となる。三国に戻り療養を続けながら抒情的な俳句を詠み続けたが、昭和22年に29歳で死去。森田愛子の面影は虚子の小説「虹」、「音楽は尚お続きおり」などでも知ることができる。

【茶道・華道】（追記）

茶 道

◆福井県茶道連盟 わこうかい 和光会

- ・ 昭和 29 年、足羽山での煎抹各流大茶会の開催をきっかけに設立された。
当初は春・秋の 2 回開催していたが、現在は毎年春に開催しており、平成 20 年で 55 回目を迎えた。
- ・ 設立当初は 12 流派が加盟していたが、現在は 14 流派が加盟している。
- ・ 毎年恒例の煎抹各流大茶会のほかにも、親子向けの「親子ふれあい茶会」を開催し、茶道の普及・継承のための活動を行っている。

◆茶の湯同好会 ちやのゆどうこうかい

- ・ 茶の湯同好会は、昭和 59 年、えちぜんとうげいむら 越前陶芸村を拠点に、特定の流派に限らず、茶の湯を楽しもうとする人たちが集まって、茶道の知識を学び、情操を高めるという目的で発足した。
- ・ 会員は、発足当初は 28 名だったが、現在は 200 名余まで増加した。
- ・ 誰でも入会できるのが特徴的で、煎茶・抹茶の各流派をはじめ、流派には属さないが茶の湯を楽しみたいという人まで、さまざまな人が参加し、月例釜や季節毎に茶の湯を楽しむイベントを実施している。
- ・ 平成 8 年からは、方向性を「岡倉点心の茶の心※」に求め、活動を行っている。
※「茶道は単なる審美主義ではなく、日本人の自然観、日本の風土に育まれた美意識をもち、日常生活の中にある美を崇拝することを根底とする儀式である」というもの

◆学校での取組み

- ・ 茶道裏千家たんこうかい 淡交会による学生茶会や表千家どうもんかい 同門会による学校茶道茶会が開催され、園児から大学生まで、非常に多くの子どもたちが参加している。
- ・ 他の団体においても、公民館や学校等で子ども向けの茶道教室を開催している。

華 道

◆県華道協会の設立

- ・ 戦後しばらくは福井市文化協会に加盟している 7 流派によって、文化協会主催の文化祭においていけ花展を開催していた。
- ・ しかし、華道界における相互の連絡提携や華道芸術の向上発展には、組織の統一と窓口が不可欠であったことから、福井市文化協会の華道部の理事を中心に、昭和 56 年、加盟 8 流派、23 団体、750 名の会員によって福井県華道協会が設立された。現在は、12 流派が加盟している。
- ・ 昭和 56 年 12 月に第 1 回の華道協会展を開催し、以後、毎年 1 回開催している。現在は、ふくい県民総合文化祭「華のフェスティバル」として実施

◆学校での取組み

- ・ 各団体で、公民館や学校等で子ども向けのいけばな教室を開催している。

茶道・華道共通

◆活動参加の実態

- ・ 感性が養われるのは高校生ままでであるので、高校生ままでに活動開始すれば、この時期に大きな上達があるが、若い人たちの参加は徐々に減ってきている。理由は、若い人たちにとってほかにやりたいことを選択肢が増えたことや2、30年前に比べ、“花嫁修業”を動機としての参加がほとんど見られなくなり、身近で地域の個人教室等に通うかたちで活動する人が非常に少なくなったことが挙げられる。
- ・ こうした中、中学期・高校期の活動は、地域の個人教室から学校での部活動にシフトしている傾向も見受けられ、活動が本格化するのは、中学、高校の部活動参加の時期となっているが、学校で茶道に触れる一層多くの機会が求められている。
- ・ こうしたことに対して、県茶道協会や裏千家、表千家の各県支部においては、学生茶会や親子参加イベント等を開催し、園児から大学生まで非常に多くの参加者たちとの交流を通じて、子どもや若年層の茶道への参加促進を積極的にはたらきかけている。

【映画】(追記)

◆戦後の映画文化普及の動向 ～福井映画サークル協議会の設立・変遷～

- ・ 昭和 25 年 10 月、良い映画を守り育てる運動などを行う全国的組織として「福井市映画サークル協議会」を発足。(昭和 29 年に「福井映画サークル協議会」に名称変更)

結成以来、作品の紹介と批評を兼ねた機関誌を毎月欠かさず発行し、^{つぼかわけんいち}坪川健一、^{おのただひろ}小野忠弘、^{のりたけかすお}則武三雄、^{すぎはらたけお}杉原丈夫ら県内の様々な芸術分野の著名な知識人・文化人が長年にわたって執筆した。

- ・ 発足当時の会員数は 620 名。全盛期の昭和 33 年には 4,776 名を数えたが、昭和 50 年代に

は、ビデオメディアが普及するなど映像文化の多様化により映画産業が斜陽化し、映画人口も減少。平成 7 年には会員が 650 名にまで落ち込んで存亡の危機に瀕したが、県内の映画館で組織する「福井県環境衛生同業組合」の全面協力により、新たに「会員特別優待制度」の導入とともに新生「映画サークル協議会」がスタート。平成 11 年には、会員数も 1,800 名までに回復したが、平成 19 年 3 月末には、会費未納やスタッフ不足により活動を停止。

- ・ 翌月からインターナショナルクラブが引き継ぎ、「福井映画サークル」として活動を継続したが、1 年後、優待券の値上げなどにより会員が大量脱退。現在は 370 人まで落ち込んでいる。

◆みに・キネマ・福井

- ・ 昭和 63 年 4 月、福井で岩波映画を上映したいと「岩波映画を観る会」が発足。これをベースに、平成 6 年 4 月、岩波映画にこだわらず上映したいと、「みに・キネマ・福井」に改称
- ・ 商業ベースに乗らない名画、ドキュメント映画など、様々な映画の自主上映会を年間 4 回程度、ボランティアグループの手で地道に上映し続けている。

平成 19 年、地道な自主上映活動により 野の花文化賞（(財)福井県文化振興事業団）を受賞

◆福井の映画祭

- ・ ふくい街かど映画祭（平成 9 年～13 年）

福井で活動している様々な映画鑑賞グループが集い、福井で観ることができなかった作品の上映を主たる目的として開催。平成 17 年には、国民文化祭ふくい 2005 映像文化フェスティバルの 1 つとして開催

- ・ 福井映画祭（平成 18 年～）

^{さばえ}鯖江市において、全国から応募のあった自主制作映画の上映を行っている。

- ・ 福井まちなか映画祭（平成 19 年～）

「まちなかアートフェスタ」の中で開催。福井のインディーズ映画を作っている人たちによる映画祭で、中学から高校、大学、一般に至る幅広い参加がある。

本県出身・ゆかりの著名な映画監督等 (追記)

- ^{よしだきじゅう}吉田喜重（映画監督。福井市出身；1933—）

昭和 30 年、東京大学文学部仏文科を卒業後、松竹大船撮影所に入社。木下恵介等の助監督を経て、

昭和 35 年に「ろくでなし」で監督デビュー。大島渚、篠田正浩らとともに松竹ヌーヴェルヴァーグで活躍。昭和 48 年から映画界を離れテレビドキュメンタリーで活躍したが、昭和 61 年に「人間の約束」で復帰。最新作は平成 14 年の「鏡の女たち」

平成 11 年、著書「小津安二郎の反映画」で芸術選奨文部大臣賞を、平成 15 年、フランス政府から芸術文芸勲章オフィシエ賞を受賞。福井ふるさと大使

^{かわさきよしすけ}
○河崎義祐（映画監督。福井市出身；1936—）

昭和 35 年慶應義塾大学経済学部を卒業後、東宝に入社。黒澤明、加藤泰、^{たい おかもときはち}岡本喜八等の助監督を務めた後、昭和 50 年、「青い山脈」で監督デビュー。以後、「残照」、「炎の舞」、「青春グラフィティ スニーカーぶるーす」、「ブルメリアの伝説 天国のキス」など多くの青春アイドル映画を手がけた。

NPO法人シネマネットジャパンを立ち上げ、映画館に足を運べない老人のための出張上映サービスも行っている。

平成 16 年に文芸大賞・映画功労賞（日本文芸振興会）を、平成 17 年に文化庁映画賞を受賞
福井ふるさと大使

^{おくむらまさひこ}
○奥村正彦（テレビドラマ演出家、映画監督。勝山市出身；1942—）

昭和 40 年、日本大学芸術学部映画学科を卒業し、東京映画に入社。昭和 57 年にTBS花王愛の劇場「トラック母ちゃん」で監督デビューし、昼の連続ドラマ、サスペンス、時代劇、ミステリー等テレビの連続・単発ドラマを演出

平成 11 年には、「虹の岬」で初の映画監督も務めた。

^{とだ ひろし}
○戸田 博（映画監督。丸岡町出身・京都府在住；1951—）

父親の影響で映画に強い関心を持ち、16 歳から 8 ミリ映画を製作。その後、県立精神病院で看護師として勤務の傍ら映画製作を続け、福井のみならず東京、大阪の映画館で公開を続けた。昭和 59 年に京都に移転。診療所の共同経営の傍ら作品を撮り続けている。

平成 17 年、パピエミュール映画祭（フランス）で「春雪」が最優秀賞を受賞。リヨン・アジア映画祭において、平成 19 年に「十二月の空」が観客賞グランプリとニュー・アジアン・シネマ（1 位）を受賞。平成 20 年には「夏の宴」がヤング観客賞を受賞

^{おのであきのり}
○小野寺昭憲（映画監督、映像作家、俳優。福井市出身；1980—）

大阪芸術大学芸術学部映像学科中退後、映画製作プロダクションを創設。短編「日本の夏」が、平成 17 年に小田原映画祭で携帯ムービー部門最高賞の金賞を、平成 18 年には同作が淡路島映画祭でも最高賞を受賞。平成 19 年には、監督、脚本、主演など 1 人 6 役を務める「白鳥の湖／SWANLAKE」が小田原映画祭で審査員特別賞を受賞

平成 20 年 10 月には、Yahoo!JAPAN 文学賞受賞作「雪の花」の映画化の監督を務めることが発表された。

【漫画・アニメーション】（追記）

◆全国的に活躍する福井県出身者

- ・ 昭和30年代後半、鯖江市出身の久里洋二くりようじがアニメーションを芸術活動としてとらえ、数々の実験的アニメーション作品を制作。海外の映画祭等においても数多くの賞を受賞するなど、国内外において高い評価を受けている。
- ・ 越前市出身の池上 遼一いけがみりょういちは、写実的な画風で「男組」「傷追い人」等少年漫画誌や青年漫画誌の連載作品を数多く手がけている。平成13年、「HEAT-灼熱」で第47回小学館漫画賞を受賞
- ・ 坂井市出身の西ゆうじは、坂井市丸岡町を舞台にした「蔵の宿」や福井出身の主人公の活躍を描く「あんどーなつ」等の原作を手がけており、「蔵の宿」は連載が10年を超え、また、両作品ともにテレビドラマ化されている。
- ・ このほか、本県出身で青年漫画誌等で連載を手がけている漫画家には、須賀原洋行すがはらひろゆき（「うああ心理学入門」など）、桂 正和かつらまさかず（「ZETMAN」など）、石黒正和いしぐろまさかず（「それでも町は廻っている」「木曜日のフルーツ」など）などがある。

◆高校生の漫画活動

- ・ 県内の高等学校のうち4校が漫画、アニメーション分野の部、同好会（以下「漫画研究部」という。）を設置しており、部活動参加者は50名余りである。ただし、漫画研究部を設置していない高等学校が多いことや美術部等で漫画やイラストを描いている学生もいることから、この数に含まれない活動者も多い。
また、漫画研究部に入っているが、美術部等他の部活動と兼部する者が多くなっている。
- ・ 高校生の漫画分野における全国的なコンクール 全国高等学校漫画選手権大会「まんが甲子園」（主催：高知県ほか）には、直近5か年において、本県から毎年1、2校が参加している。

【参考】まんが甲子園への出場校数実績

開催年	参加校	
	全 国	福井県
平成20年（第17回）	326校	1校
平成19年（第16回）	299校	2校
平成18年（第15回）	330校	2校
平成17年（第14回）	300校	1校
平成16年（第13回）	318校	1校

（備考） ・参加は1校あたり1チーム（3人～5人）

・予選審査を通過した30チームが高知県で開催される本選会に出場

◆若い世代の活動者

- ・ 中学生以上の若い世代において、数人でサークルをつくり、同人誌の作成等の活動を行っている者もいる。
- ・ 同人誌の販売等を行う漫画関連のイベントが、年に数回、県内で開催され、若い世代を中心に賑わいをみせており、活動者の交流の場ともなっている。
- ・ 県内での漫画関連のコンクールとしては、福井県デザインコンクール（主催：福井県デザイナー協会）の応募部門の一つに「イラスト・マンガ・スタイル画」が設けられている。

【福井における若者の文化活動について】（追記）

◆^{がくしげんたつ}楽衆玄達

- ・ 平成17年11月結成。尺八や三味線などの邦楽楽器とエレキギターやサクソなど洋楽楽器に謡曲や長唄、ヒップポップなどのボーカルが加わった総勢20名を超えるグループ
- ・ これまでに3枚のCDを発表し、福井の歴史や文化、自然を題材にしたオリジナル曲で福井の良さを表現し、県内外に発信している。

◆きむ

- ・ 昭和55年、小浜市生まれの詩人・写真家。本名は木村行伸^{きむらゆきのぶ}。出版物・雑貨の企画・制作・販売等を手がける「いろは出版株式会社」（京都市）代表
- ・ 詩と写真からなる作品集やポストカードを発表し、「日本ドリームプロジェクト」の代表として、「夢」をテーマに活動中

◆ナナ・イロ

- ・ 福井県立大学の同級生であった福井県出身の岩堀路子^{いわほりみちこ}と愛知県出身の内海あい^{うつみ}で結成された音楽ユニット
- ・ 平成15年、「SONYぶっとびオーディション」で初代グランプリを獲得。平成18年、フジテレビ系「めざましどようび “めざうたコンペ・秋の陣”」で優勝し、「たからもののうた」でメジャーデビュー。セカンドシングル「ブランケット」はドラマ「鬼嫁日記いい湯だな」の挿入歌として起用された。福井ミラクルエレファントのテーマソングを手がけるなど、現在、県内を中心にライブ活動などで活躍中

◆ザ・ルーズドッグス

- ・ メンバー4人全員が福井県出身。福井高専で知り合い、卒業記念ライブを機に結成されたバンド。旧福井駅地下道の路上ライブで徐々に知名度を上げ、平成17年、「ラジオガール」でメジャーデビュー
- ・ 平成18年発売の「しょぼい顔すんなよベイビー」はNHK教育のアニメ「メジャー」のエンディングテーマに起用。ジャケットは本県出身の書家、吉川壽一氏が揮毫を担当。その後も平成19年「夜になれば」、平成20年「ONE DAY」、「雨のち虹色」が同アニメのエンディングテーマに起用され、福井放送や福井銀行など地元企業のCMなどでも活躍中

◆全国YOSAKO「衣」デザインコンペティション in ふくい

- ・ 繊維産地・福井県を全国にPRするため、全国のよさこいチームを対象に、オリジナル衣装を競い合うデザインコンペを実施。主催は、県、関係市、業界団体で構成される「ふくいファッションイベント実行委員会」

- ・ 大賞受賞チームには、受賞した衣装50着分が副賞として提供され、次年度以降の各地のよさこい大会で着用してもらい、福井県のPRに一役買ってもらっている。

本県においても、平成11年から毎年8月、福井フェニックス祭りにおいて「YOSAKOI イッチョライ」が開催され、性別や年齢に関係なく、年々参加者が増加している。

◆学生発「街なか」にぎわいプラン

- ・ 学生が主体となって「街なか（中心市街地の商店街など）」で実施する商業活性化や賑わい創出のための企画を県が公募し、優秀な企画には事業実施のための経費として報奨金を提供
- ・ 平成18年に優秀賞を受賞した「たわら屋」は、福井大学の学生達が地元と協働し、たわらまち田原町商店街の空き店舗を利用して、情報発信・交流・自己表現発表の場として「たわら屋」を運営。銭湯の壁画を制作したり、街中アートギャラリー展など多彩なイベントを開催している。

◆敦賀短期大学地域総合学科 音楽フィールド

- ・ 全国でも稀なジャズやロック系専門の授業を実施。世界的なジャズピアニスト松居慶子氏や、国際的に活躍する敦賀市出身のダンサーみしろまさし三代真史らが講師を務めている。
平成21年2月、第1期生が卒業公演を行った。

◆学生ベンチャー研究室「VOLENTE（ボランチ）」

- ・ 県内各大学から集まった学生集団。「学生を元気に！福井を元気に！」を目指し、フリーペーパー「are（アレ）」の制作を軸に、フェイスペイントや街なか活性化、ビジネスプランコンテストへの参加など、様々な活動を行っている。

◆小原ECOプロジェクト

- ・ 福井工業大学の学生達が地区住民や森林組合と協力し、かつやましきただにちょうおはらちく勝山市北谷町小原地区で行っている地域再生、活性化プロジェクト。雪で破損した家屋の調査、修復作業を大工棟梁の指導を受けて行うことで、伝統的木造建築の技術を直に学んでいるほか、空き家に宿泊しながら共同生活、山村生活を体験し、社会性や協調性を養っている。

◆えくらちゃんクッキー

- ・ 日本海で大量発生し、漁業被害をもたらしている「エチゼンクラゲ」の有効利用を図るため、小浜水産高校の生徒達が地元企業と共同でクッキーを開発
- ・ エチゼンクラゲを煮詰めて作る粉末が入ったクッキーは、各種ミネラルを含み、ほのかな塩味がお土産などとして人気

福井県内大学における文化部・文化サークル活動と所属人数（追記）

平成20年12月1日現在

	福井大学		福井県立大学		福井工業大学		仁愛大学		仁愛女子短期大学		敦賀短期大学	
	部活動・クラブ活動の名称	部員数	部活動・クラブ活動の名称	部員数	部活動・クラブ活動の名称	部員数	部活動・クラブ活動の名称	部員数	部活動・クラブ活動の名称	部員数	部活動・クラブ活動の名称	部員数
美術	美術部 アートデザインサークル 写真部	19 6 24	美術部 atelier de photo	5 15	美術部 写真部	29 18			写真	7		
書道	書道部	23							現代書道文化研究会	8		
洋楽(合唱)	グリーンエコ合唱団	15										
洋楽(吹奏楽)	吹奏楽部	49	吹奏楽部 吹奏楽部サークル*	16 6	吹奏楽部	11	吹奏楽	20				
洋楽(器楽・管弦楽)	フィルハーモニー管弦楽団	42	福井県立大学管弦楽団	20								
邦楽	邦楽部	16										
演劇	演劇部	12	演劇部	15								
文芸			文芸部	12	文芸同好会	16						
茶道	茶道部	15	裏千家茶道部 裏千家茶道部*	24 8	茶道部	7	茶道	10	茶道	11	茶道部	13
華道			華道部(池坊)	12					華道	11		
ポピュラー音楽	Free Music Club Music Life ポピュラーミュージック研究所 ロック研究所 電子音楽研究会	20 6 20 9 7	軽音楽部 音楽サークル*	48 11	軽音楽部 フォークソング部	9 14	軽音	40	軽音楽 FSM(FreeStyleMusic)	7 13	軽音部 DTM(desk top music)研究部	2 7
太鼓			和太鼓部*	6			和太鼓	25				
映像	映画部	8	映像文化研究会	4	映像デザイン部	1						
囲碁	囲碁部	21	囲碁部	8	囲碁部・将棋部	5						
将棋	将棋部	12										
演芸	お笑いサークルOS	7										
放送	放送部	12	放送サークル	5	放送部 ラジオ放送研究会	9 9						
ボランティア	BBS(Big Brothers and Sisters movement) 暁 児童文化研究会(児童劇ボランティア) ボランティアサークルTogether	8 7 27 31	ボランティア部 Open the せさみ	18 6	学生ボランティア部	4	ボランティア	50	ボランティア	15		
英会話	E.S.S(English Speaking Society)	13	ESS時事英語研究会	8	メカトロニクス部	13	モーショングラフィックス	20				
その他	社会思想研究会 Bible Study Club Peace Creators Club SF研&ゲーマーズクラブ 学生ベンチャー研究室 ボランチ からくり工房I, Sys コンピュータ部 電子工学研究会 フォーミュラ製作プロジェクト(FRC) 麻雀サークルMFC 漫画研究会(Fukui Comic Studio) ユネスコ倶楽部 レスQちQ(サークル)	5 5 15 16 7 37 22 9 14 20 33 6 7	日本遊戯振興会 農業サークル フレンズ レスQちQ(サークル) メディアサークル かりぶ 野塾	5 9 15 7 5 6 7	マイクロコンピュータ部	13	イベント企画参加	20	栄養指導研究 絵本 折り紙研究会 食物研究 チーズフォンデュ ひまわり ユネスコ	15 12 28 6 15 26 31	考古学研究会	9
計		625		301		158		185		205		31

※福井県立大学の*印は小浜キャンパス